

チーム学校による教育相談の充実に向けて

—専門性を高めるための魅力ある研修づくり—

教育相談センター

岡崎 良子 持田 忠司 石田 郁恵

教員とスクールカウンセラー（以下、SC）、スクールソーシャルワーカー（以下、SSW）等の専門職が協働する「チーム学校」による教育相談の充実を目指し、教員と専門職が、それぞれ教育相談、心理・福祉の専門家として力量を形成することができる、魅力ある研修づくりに取り組んだ。

本稿では、その取り組みについて報告し、明らかになった課題を踏まえて今後の方向性を示す。

**〈キーワード〉 チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会 事例検討会 アセスメント
ホワイトボード スクールカウンセラー スクールソーシャルワーカー**

I はじめに

「令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では、不登校児童生徒数、いじめ認知件数、暴力行為発生件数はそれぞれ過去最多となった。児童・生徒の自殺者数も依然として高止まりしており、憂慮すべき状況が続いている。

複雑化・深刻化する諸課題に対応するため、教員とSC・SSW等の専門職が連携、協働し、「チーム学校」として児童・生徒の支援を行っていくことが学校には求められている。

『生徒指導提要』において、これからの生徒指導の基本的方向性の一つとして、「チーム学校」による生徒指導体制の構築があげられ、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」においても、児童・生徒の小さなSOSを見逃さない「チーム学校」による早期支援があげられている。「チーム学校」の意義は広く知られるようになり、学校現場では専門職の配置が拡充され、体制の整備が進みつつある。今後は、「チーム学校」が効果的に機能することで、より実効的な支援が行われることが期待される。

そのためには、教員と専門職それぞれが高い専門性を持ち、相互にその役割や視点を理解し、自らの専門性を発揮しながら連携、協働して支援にあたる必要がある。また、専門職に対する学校現場のニーズは多様化しており、それに対応できるような専門職の専門性向上も課題である。

そこで、本センターでは教員、専門職を対象とした以下の三つの研修実践に取り組んだ。

- 1 チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会
- 2 訪問型研修
- 3 SC・SSW研修会

II 実践の概要及び結果

1 チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会

(1) 目的

児童・生徒の不登校や問題行動等の諸事例をもとに、教育心理、臨床心理に造詣の深いスーパーバイザーの指導、助言を受けながら事例検討を行い、「チーム学校」で支援・対応する力を高め、各学校における教育相談の充実および推進を図る。

(2) 令和7年度の取組み

「チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会」(以下、本研修)を受講することに関心を持てるよう教員にとって魅力ある研修とするため、令和6年度の課題等を踏まえ、今年度は以下の取組み・内容で進めることとした。

① 前年度の課題を踏まえた新たな取組み

令和6年度の課題	解決に向けて	令和7年度の新たな取組み
研修の主旨の共有が難しかった	<ul style="list-style-type: none"> 視覚的な提示による内容の再確認と定着 取り組みやすさの周知 教員の実践意欲を喚起する工夫 多職種との連携推進 	<ul style="list-style-type: none"> コンパクトに説明できる提示資料等の活用(図1) 校内事例検討会等で活用できる配付資料の提供(図2) ロールモデルとなる取組みの紹介
より魅力ある研修内容が求められるようになってきた	<ul style="list-style-type: none"> 個人の力量形成に向けて、受講者の見識を広げる 多職種との協働を推進 	<ul style="list-style-type: none"> 所員や県SCによるミニレクチャー(15分)の実施 研修会の周知方法の工夫(案内チラシ・配信等)(図3) 専門職(SC・SSW)の参加促進
会を重ねるごとに参加者数が増加し、新たな対応が必要となった	<ul style="list-style-type: none"> 研修への参加意識・満足度の維持 グループ内、会場の一体感 	<ul style="list-style-type: none"> 事例検討を2事例から1事例に減らし、見立て・手立ての場面でグループ協議した内容を発表し全体で共有 会場は椅子のみ設置

②参加人数・校種・職種の内訳

回次	開催地	ミニレクチャーのテーマ	講師	事例検討主訴(校種)	小学校	中学校	高校	特別支援学校	適応指導教室	SC・SSW	その他	合計
1	福井	チーム学校で取り組む教育相談～SSWの業務について～	課長	問題行動(中学校)	13	3	1	2	0	3	0	22
2	敦賀	最近の不登校事例に関する所感	SC	不登校(小学校)	19	5	1	1	0	3	3	32
3	勝山	保護者との連携～困っている子どもたちに寄り添うために～	センター長	保護者対応(小学校)	12	1	1	2	0	7	3	26
4	小浜	アセスメント～(情報収集+分析)について～	心理士	発達課題(小学校)	13	3	4	0	2	2	5	29
5	鯖江	緊急対応～いざというときの支援のために～	SC	希死念慮(高校)	20	1	6	4	2	7	0	40
6	坂井	SCとして、私は何をしているか?	SC	保護者対応(小学校)	8	5	2	1	0	7	2	25
				合計(名)	85	18	14	10	4	29	13	174

*第2回・・・夏期休業中に開催、第5回・・・冬期休業中に開催

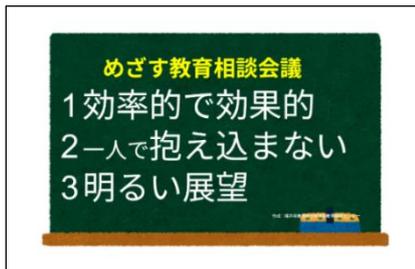


図1 提示資料一部



図2 配付資料一部



図3 案内チラシ

(3) 結果と考察

① 参加状況

「チーム学校」としての研修会を始めて3年間が経過し、参加者数は年々増加してきている(図4)。今年度の増加について以下、考察する。

ア この3年間、年間を通して県内6会場（嶺北4会場 嶺南2会場）で開催し、その都度案内を送付し周知を進めながら実施してきたことで「チーム学校の研修会」としての認知が進んだと考えられる。

イ 6回のうち2回は長期休業中に実施している。長期休業中開催の研修会については県内各地から早い段階での申込みがあり、参加人数はやや多い傾向が見られる。以前から本研修に関心を持っていた教員が、時間的にゆとりのある時期を選び、意欲を持って参加していると推察される。

ウ 研修会開催市町教育委員会に管理職への周知を依頼したことで、管理職からの声かけがあり、教員が参加しやすくなったと考えられる。

エ 案内チラシにあらかじめ研修の流れを示して見通しを持てるようにしたことで、初めての参加者も安心して申し込むことができたと考えられる。

オ 小中学校勤務の養護教諭の本年度参加人数は延べ40名（全体の23%）で、そのうちの5名は複数回参加している。本研修が、心身両面から児童・生徒の健康に関わっている養護教諭の求める内容となっていると推察される。

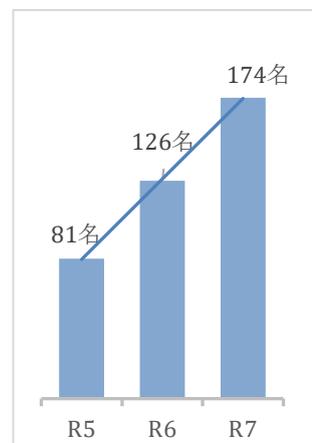


図4 参加者数の推移

② 満足度

受講者を対象にアンケート調査を行った。枠内は主な理由を示す。（のべ回答数 121 名）

A 満足 84% B 概ね満足 16% C やや不満 0% D 不満 0%

- A・ホワイトボードに流れがすべて見えている。
- A・ミニレクチャーも事例も毎回違うので、視野が広がり勉強になる。
- A・多職種の人から、適切、的確、多様な考えを聞くことができた。
- A・どのようにチームで動くとよいか分かった。

今年度は、研修への参加意識がさらに向上するように構成の見直しを行った。特に、昨年度までの事後アンケートでも「多職種・他職種でのグループ協議」に関する感想が最も多かったことを受け、これまで以上に教員と専門職が相互の役割を理解し合えるよう、グループ協議を2場面に増やした。専門職からの知見を得て、現在抱えている学校での課題にも「チーム学校」で対応する中に解決の糸口があると気付き、本研修のめざす「明るい展望」を持たせたことが教員の満足度の高さに繋がったことが示唆された。

③ 実践意欲

本研修の学びを自校での事例検討会実践に繋げることが成果のひとつであると本センターでは考えている。実践意欲に関するアンケートの結果とそれぞれの状況からの主な理由を示す。

A すでに実施 19% B 必要があれば実施 38% C 実施を検討 41% D 実施は難しい 2%

- A・実施後に手立が見えた気がした。
- A・見通しを持てたので、その後の子どもとの関わりで生かしている。
- B・目標に向かってみんなで歩みやすい。
- C・ホワイトボードで可視化され、皆の考えが整理されていくのがよかったので実施してみたい。
- D・ファシリテーターをする自信がない。
- D・SCとして参加できる時間が限られている。

参加者の 80%が「ぜひ実施したい」「実施を検討したい」と回答しており、本研修直後には実践意欲を持って学校に戻っていることがわかる。ただ、実際の自校での実施率は6割程度に止まっていることが課題である。そこで、本研修が自校実践に繋がる研修となるための手がかりを探すことにした。

2 訪問型研修

(1) あわら市金津東小学校の取組み

これまでに本研修に参加した経験のある養護教諭(教育相談担当)と学校 SC から自校実践への協力依頼を受け、全3回の訪問型研修として実施した。

- ① ねらい 金津東小学校：ケース会議を通して児童理解を深める
本センター：自校の教職員でケース会議ができるようになる
- ② 対象教員 全職員 13名
- ③ 研修内容

第1回(6/19)担当者打ち合わせ

第2回(7/4)校内研修【事例検討会①】ファシリテーター：所員 * 県 SC、学校 SC が参加

第3回(8/25)校内研修【事例検討会②】ファシリテーター：養護教諭 * 学校 SC が参加

④ 結果と考察

以下、実施後の感想をそれぞれの立場から示す。

ア ファシリテーター(養護教諭)

先生方のアイデアを引き出したり良い雰囲気を共有できたりして楽しかった。予想していた以上に、次々と先生方が手立として役割を申し出てくれたことが、研修会の成果だと思う。

イ 事例提供者(担任)

先生方全員に考えていただきありがたかった。先生方に助けをもらいながら乗り切りたい。

ウ 教務主任

研修会後は、以前と比べて学級での課題をオープンにできる雰囲気に職員室が変わった。

エ 学校 SC

研修会後も先生方と細かな情報共有ができています。先生方にチーム学校の一員として認識してもらえた実感がある。

2回の事例検討会を通して一人の児童への理解は深まり、今後は全職員で気がかりな子どもたちを見守っていかうとの共通意識が高まったことは大きな成果であり、金津東小学校のねらいは十分に達成できた。本センターの研修を活用することで、同僚性が構築され「チーム学校」ができていった好事例であり、以後、「チーム学校」で児童・生徒理解を進めているロールモデル校になった。(図5・図6) また、自校実践ができるようになるという本センターのねらいについては、養護教諭を中心に複数の協力者ができたことから、今後も継続してケース会議ができると期待できる。養護教諭と学校 SC は本研修に複数回参加しており、校内での課題について「チーム学校」で取り組むことで、いくつもの支援策、可能性を見つけられると学んでいた。養護教諭に学校 SC という「もうあと一人の協力者」がいたからこそファシリテーターにチャレンジすることができ、その後の自校実践に繋がっていったと言える。

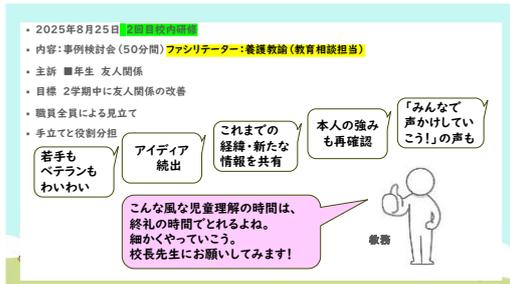


図5 校内研修の成果についてのスライド



図6 「チーム学校」による支援についてのスライド

(2) 越前市教育相談部会の取組み

昨年度末に越前市小中学校教育相談部会長(校長)からの依頼を受け、本年度「訪問型研修」を実施した。

- ① ねらい 教育相談部会:「チーム学校」の相談体制に向けて個人の力量(見立て・手立て)向上をめざす
本センター:市内全ての学校でケース会議ができるようになる

- ② 対象教員 越前市小中学校教育相談部会員 各校1名以上 32名

③ 研修内容

第1回(5/20) 担当者打合せ:部会長

第2回(8/1) 研修【事例検討会①】ファシリテーター:所員 *県SC、県SSWが参加

・自校で事例検討会を実践し、その記録写真を第3回の時に持参することとした。

第3回(11/28) 研修【実践報告会、グループ別事例検討会②】ファシリテーター:会員

④ 結果と考察

第3回研修後に、今後の自校実践についてのアンケート調査を行った。主な感想を示す。

A 活用できる(50%) B まあまあ活用できそう(50%) C 活用は難しい(0%)

- A・短時間でゴール(手立て)まで考えることができるのが良い。
- A・話し合いの目標がはっきりしていることが効率的・効果的だ。
- A・全員がホワイトボードに集中して情報を共有するので、意見が出やすい。
- B・この手法を実践するには、日頃の職員間のコミュニケーションも大事。
- B・話をしながら書くのは大変で、進行役と記録係の二人で担当を分けて実践した。

越前市内の全ての学校が実践報告会に参加したこと、全てのグループで事例検討会が運営できていたことから、本センターのねらいは達成できたと考えられる。今年度2回にわたる研修会を経て、越前市で1校に一人は事例検討会を開催できる力を持った教員が存在するに至ったのは、教育相談部会長の「各学校で担当者の力量を向上させることにより教育相談体制をさらに整えたい」との強い願いとリーダーシップがあったからである。本センターの研修が教育相談部会長の願いに沿うように、十分な話し合いを重ね内容を検討した上での実施であった。今後も「訪問型研修」を実施する際には、学校の教育相談体制の現状やめざす姿を踏まえた上で、管理職の考える「チーム学校」づくりに伴走していく必要がある。一方、教育相談部会のねらいである「個人の力量形成」に向けては、今回をきっかけとして今後もさらなる研鑽が求められる。ただ、上記「まあまあ活用できそう」の感想からは、教員の負担感が見えてくる。無理のない柔軟な方法での継続が校内での活用と定着に繋がっていくのであり、そのためにはファシリテーターの負担を軽減する役目を担う「もうあと一人の協力者」の存在等が必須と考える。

以上、今年度実施した研修会を通して明らかになったことを踏まえ、本センターとしては次のような流れで各学校に教育相談体制を構築していくことをめざしたい。①「チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会」を契機に、この手法の良さを知った教員(主に教育相談コーディネーター)が「管理職の理解と協力」と「もうあと一人の協力者」を得て、「訪問型研修」を実施する。②教員は自らの専門性による、児童・生徒の個別理解に基づき、同僚や心理・福祉の専門職や外部機関と連携・協働しながら、「チーム学校」として包括的な支援を継続的に行う。

「チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会」と「訪問型研修」は、主に教員を対象とした研修会である。「チーム学校」としての包括的な支援を継続的に行うためには、心理・福祉の専門職である SC・SSW の専門性向上も不可欠である。今年度は県義務教育課と協働して SC・SSW の研修を行った。

3 SC・SSW 研修会

県義務教育課では、SC・SSW が教育相談業務等において適切な支援・助言ができるよう研鑽を積むとともに、情報交換等により業務のあり方を見直すなど、その改善を図ることを目的に年 3 回の研修会を実施している。今年度は、本センターが、「チーム学校」の一員として求められる基本的役割や専門性・スキルを習得し「チーム学校」による教育相談体制を構築できる力量形成を図る視点から研修内容を検討し、県義務教育課と協働して研修を実施した。

(1) 令和 7 年度 SC・SSW 辞令交付式および研修会

① 実施日時・会場・参加者

令和 7 年 4 月 3 日（木）13：30～16：00 県生活学習館 多目的ホール

参加人数 92 名（SC 79 名、SSW 13 名）

② 研修内容 業務・役割について

「チーム学校」の一員として支援にあたる際のポイントとなる専門職による見立て（アセスメント）や助言・援助（コンサルテーション）の重要性、自殺予防教育などの心理教育の実施の必要性などについて、本センター職員が概要を説明し、令和 7 年度の研修の目的について方向性を明確化した。

(2) 令和 7 年度 第 1 回 SC・SSW 研修会

① 実施日時・会場・参加者

令和 7 年 8 月 20 日（水）13：30～16：00 県生活学習館 多目的ホール

参加人数 107 名（SC 70 名、SSW 22 名、24 時間電話相談員 7 名、その他 8 名）

② 研修概要

ア 講義「学校のニーズに対応できる専門職」 講師 本センターSC

講義では、「チーム学校」として組織的かつ協働的に生徒支援を実施するために、SC・SSW が短時間で必要な情報を同定・収集し見立てを伝え、学校と同じ方向に向かって支援をすすめることの重要性やポイントが説明された。また、心理教育や教職員向けの研修を実施するスキルも要求されており、どのように自己研鑽し、対応できるようにしていくかも教示された。

イ グループ協議

グループ協議では「支援のニーズが学校と保護者・本人とで違っているが、勤務時間の制約があるため、共通の見立て・支援をすることが難しい場合がある」「SC と SSW の勤務状況が違うため情報共有が難しい」

「心理教育の資料や実施方法などの共有、授業の見学ができる体制づくり」「学校（管理職）ごとに SC・SSW の理解、活用に差がある」等の意見が出された。

ウ パネルディスカッション

- ・パネリスト SC スーパーバイザー SSW スーパーバイザー 本センターSC 中学校 教頭
- ・コーディネーター 本センター長

パネルディスカッションでは、グループ協議を踏まえ、パネリストからの助言や意見交換が行われた。

「ニーズが異なる場合には、SC・SSW は保護者や本人の思いをよく聴き取りながら学校と調整していく必要がある」「SSW は勤務時間の調整がしやすいため、SC に合わせて、情報共有していくことが望ましい。電話やメールも活用する」「学校は SC・SSW が業務しやすいよう、ケースを適切にコーディネートすることが重要である」等、「チーム学校」を推進するための具体的な方策について議論された。

(3) 令和 7 年度 第 2 回 SC・SSW 研修会

① 実施日時・会場・参加者

令和 7 年 11 月 18 日 (火) 13 : 30 ~ 16 : 00 県生活学習館 多目的ホール

参加人数 96 名 (SC 63 名、SSW 20 名、その他 13 名)

③ 研修概要

ア 講義「教育・医療の連携」 講師 福井大学医学部附属病院 臨床心理士

福井大学医学部附属病院 精神保健福祉士

講義では、診断や薬物療法は医療の役割である一方、学校現場では生活機能などの機能障害が把握しやすく、状況を全体的にアセスメントできることが述べられた。また、自傷行為や対人関係トラブルの多い子どもは、虐待による愛着障害を抱えているケースがあることや、そのような子どもへのケア・対応のポイントが説明された。連携について、要保護児童対策地域協議会ケースでは会議等で医療機関と学校が情報共有しやすいことや、福井大学附属病院受診までの流れについての説明がなされた。

イ グループ協議

グループ協議では「保護者の理解が乏しく、受診につながらない」「学校と病院が連携する際の病院の窓口について」「医療機関につないだ後の連携の難しさ」等の意見が出され、活発な協議がなされた。また、同一地域内の多職種によるグループ分けにしていたため、近隣の医療機関の情報共有も適宜行われた。

ウ パネルディスカッション

・パネリスト SC スーパーバイザー SSW スーパーバイザー

福井大学医学部附属病院 臨床心理士 精神保健福祉士

・コーディネーター 本センター 主任

パネルディスカッションでは、グループからの質問・意見を踏まえ、パネリストからの助言や意見交換が行われた。

「学校と SC が保護者と児童・生徒の状態についてしっかり情報共有し、受診の必要性について丁寧に説明すること」「受診や治療について保護者が不安を感じている場合、SC は傾聴・受容しながら、一緒に検討していく」「医師は多忙なため、病院の心理師や精神保健福祉士が連絡・調整の役割を担っている」「受診後の効果的な連携のために、SSW の受診同行や要保護児童対策地域協議会のケース会議などを活用する」

「受診後も学校で可能な支援について検討し医療的ケアと並行してフォローする」等、教育と医療の連携のための具体的な方策が議論された。

(4) 結果と考察

① 結果

第 1 回と第 2 回の研修後のアンケート結果は以下のとおりである。(主なものを抜粋)

ア 全体的評価

- ・基本を再認識し、振り返りや自身の課題を認識する機会となった。
- ・講義、グループ協議、パネディスカッションが連動し、理解しやすい構成だった。
- ・パネルディスカッションで現場の悩みや視点を共有でき、理解が深まった。
- ・「教育・医療の連携」というテーマが現場感覚に合っており、非常に有意義だった。

イ 学びや気づきについて

- ・「チーム学校」の一員として、SC の役割や見立てのすり合わせの重要性を再確認した。
- ・SC の専門性を生かし、積極的に関わる必要性を感じた。
- ・発達障害や愛着障害への対応について、学校でできる工夫を考えるきっかけになった。
- ・教育相談担当や管理職の理解・調整力があると連携しやすい。
- ・教職員との顔合せやコミュニケーションの時間を意識的に確保する等、アプローチを強化したい。
- ・専門職による教員研修の重要性を理解し、資料や知識をアップデートする必要性を感じた。

ウ 今後の課題等について

- ・パネルディスカッションやグループ協議の時間をより長く確保してほしい。

- ・他県との支援の違いや、成功事例・連携モデルの共有をしてほしい。
- ・医療連携の具体的方法やうまくいったケースについて取り上げてほしい。
- ・学校管理職も含めた研修を実施してほしい。

② 考察

実施後のアンケート結果から、研修内容の充実が図られ「チーム学校」による教育相談体制構築のための専門職の力量形成につながったことがうかがえる。特に専門職としての見立てや教職員・他職種との協働の重要性を再確認する感想が多かったことは、目的とも合致し、意義深いものと思われる。

心理教育については、その必要性は概ね理解されてきているが、今後、実践できるスキルを身につけるために、資料の共有や実施場面の参観などができるシステムを検討していく必要がある。また、具体的なケース対応や連携方法の提示を求める声も多く、実践力のさらなる向上にむけて、今後、研修を企画する際の検討事項といえるだろう。

パネルディスカッションでの検討からは、教員と SC・SSW とのよりよい協働のためには、学校関係者（管理職・教育相談担当等）の理解やケースマネジメントが重要なことが分かった。管理職・教育相談担当者への「チーム学校」に関する研修の強化、教育・医療・福祉担当者が合同で参加できる研修会の実施が望まれる。

Ⅲ 今後の取組み

文部科学省は SC・SSW の配置を拡充し、「チーム学校」による教育相談体制をさらに強化する方針を公表しており、教育相談に係る教員だけではなく、すべての教員が専門職の役割や視点を学び、専門職を効果的に活用して支援にあたることが求められている。また、SC・SSW は、それぞれの資格取得課程に学校教育に特化したカリキュラムは含まれていないことが多いため、学校教育や学校文化、児童・生徒が抱える課題などへの理解を深めることが求められている。今年度、「チーム学校で取り組む教育相談に関する研修会」と「訪問型研修」では主に教員を対象とし、「SC・SSW 研修」では主に専門職を対象として研修実践に取り組んだ。今後はこれらの研修を、教員と専門職が互いに学び合うクロスオーバー型の研修として、教員・専門職それぞれに参加を呼び掛けていきたい。

また、『生徒指導提要』では、発達支持的生徒指導や SOS の出し方教育などの課題未然防止教育を、SC 等の協力も得ながら実践することの重要性が述べられている。本センターでは、児童・生徒に「幸福を自ら創り出していく力」を育むことを目的とし、ソーシャルスキル教育、ピア・サポート活動、レジリエンス教育を柱とした 3 つのプログラムで構成された「福井県版ポジティブ教育プログラム」の研修も行っている。この研修は教員だけではなく、SC・SSW も対象としているが、今年度は研修を受講した SC が、研修での学びを活用し、勤務校での心理教育実践に取り組んだ例がある。教員と専門職の学びのプラットフォームとして、それぞれのニーズに応じた研修を構築したり、共に学ぶ機会を設けたりすることは、教員としての勤務経験をもつ職員と専門職が配置されている本センターの「強み」を生かせることと考える。今後も、教員や専門職の専門性を高めるための研修づくりを通して、「チーム学校」による教育相談の充実を図っていきたい。

最後に、本実践のためにご協力いただいたあわら市金津東小学校の教職員の皆様、越前市教育相談部会の皆様に、この場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 文部科学省 (2025) 「令和 6 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」
- (2) 文部科学省 (2022) 『生徒指導提要 (改訂版)』
- (3) 文部科学省 (2023) 「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 (COCOLO プラン)」
- (4) 文部科学省 (2025) 「スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーによる教育相談体制の充実」